古書の愉しみ（令和二年二月）

土屋（つちや）　博（ひろし）

一「山陽詩解　全三冊」杉山雞兒閲、根津全孝解

古書價格千五百圓也。相場は五千圓前後。廣告文に曰く、「此書は山陽先生の詩を蒐輯し俚言を以詳かに解を施したれば村兒牧童も一回此卷を開かば詩意分明自ら其妙用を晤る詩學於て最有益の珍著也」と。

賴山陽（一七八一年生れ）の十三歳の作品を例とせば、以下の如し。「十有三春秋（十三ケ年の中に）逝者已如水（死せし人は水の流るゝ如くあとにもどらぬ）天地無始終（天地は始めも終もなくいつも同じことぢや）人間有生死（人は死生があるぞ）安得類古人千載列青史（古人の如く書物に其の名を載せられて千載の後までも人に賞美せらるゝことは中々出來ぬことぢや）」

二「本朝文範　上中下」稲垣千頴・松岡太愿編輯

（明治十五年刊、上卷四九丁、中卷五一丁、下卷四五丁）

古書價格千五百圓也。和綴。最初期の中學校用國語教科書なり。後の教科書の模範とせられたりとぞ。引用數の偏りより察するに、編者は、以下の人物の文章を特に模範とすべきことを示す如くに見ゆ。

本居宣長（一七三〇年生れ）

（八月十五夜稲掛棟隆家の會に、述懐といふことを題にてかける、稲掛大平が家の、山路孝正が父の七十賀、和訓栞の序、消息文例の序、紀の國人長原忠睦、菅笠日記、道を行ふさだ、一向に偏ることの論、花のさだめ、古よりも後世のまされること、手かくこと、われから、ゆかた、今乃人の歌、から國聖人の世の祥瑞といふもの、物學はその道をよくえらびて入りそむべきこと、弟子にいましめおく詞、新なる說を出すこと、雪の朝友だちのもとへいひやる書になぞらへてかける、松平周防守殿のもとに江戸にまゐらせける）

紫式部（九七〇年より九七八年の間の生れ）

（日記上東門院御産の條、源氏物語より初春、梅、納涼、夕顔、虫、暮秋、冬月、風雨、文學、音樂、喪事、春秋の夜の評、紫上に源氏君乃御訓、内大臣殿に姫君を戒めたまふ詞、女二宮に母御息所の御誡、紫の上の思ひとりたまへるやう、阿闍梨より中の君に、匂宮より宇治の中君へ、大宮より内大臣殿をむかへたまひに、源氏君須磨にうつろはんとし給ふ時、朱雀院より女三宮へ、桐壺の更衣うせたまひて後帝より更衣の母の御もとへ）

清少納言（九六六年頃生れ）

（枕草子の跋、四季の評、淵は、傍いたきもの）

岡部眞淵（一六九七年生れ）

（手習に物にかきつけたる詞、橘常樹をかなしむ詞、和歌序會千足眞言家歌序、伴峯行をおくる歌の序、青木美行が越前へゆくをおくる歌の序、み田の尼君の肥前にゆきたまふをおくるうたの序、荷田在滿家の歌合の跋、佛足石紀、岡部日記、鎌倉右大臣の家集の評、常に友がきに教へさとしける、清瀨子のもとへ）

（小生、平假名の解讀には時間を要せり。また、これまで國文を勉強する機會の殆ど無かりしことを恥ぢ入るのみ。）

三「書翰文大成　上下」中邨秋香編

（博文館、明治三十年再販、定價金壹圓、三四八頁十三三八頁）

古書價格八百圓也。初版は明治二十九年。奇蹟的に保存狀況よく、內容的にもこの種の書籍としては筆頭に挙ぐべきものと信ず。

年始の文、以下の如し。

男子書翰文、「新年、限りなく祝ひ納め候。御地御全家ます〻〻御堅勝、御越年なされ、賀し奉り候。私無事に暮し居り候ふ間、憚りながら御休意下さるべく候。先は御慶申し上げたく、餘は後音を期し候。敬白」。

女子書翰文、「新年の御よろこび、限なくいはひ納め候。皆々樣御すが〻〻しく御歲重ねさせられ、目出度く存じあげ候。私かた一同かはりなく暮しをり候ふま〻、御心やすうをぼしめし下さるべく候。まづは年頭の御祝儀申し上げたくめでたくかしこ」。

四「和譯　聖典十種」

（興風館、明治四十四年刊、定價金五十八錢、二〇六頁）

古書價格二百圓也。

副題は「此の書を滿天下の青年諸君に捧ぐ」。

三宅雪嶺の序より、「聖典十種は孰れも古來幾億の人の讀みし者、若し讀みて徒らに時を費せるの歎あらんか、罪は書に在らず、人に在り」と。

新渡戶稻造の序より、「蓋し佛典に限らず此種の經典は必ず各國の語に譯され各々其國語を以て容易に繙讀玩味し得ねばならぬ筈のものであるに拘らず日本には未だ其の類の譯書が一般に行はれて居らない。然るに今回譯者の勞により、此の缺陷を補ふ事を得たのは實に斯道のために喜ぶべき事で今後に於ける青年は勿論日本の全國民はこれにより佛陀の教旨の存する所を知り精神の修養に資する事を得ん」と。

目次は、以下の如し。

佛說四十二章經（佛經支那渡來最初の譯經）

法句經（佛經格言集の如きもの）

佛道教經（佛陀の遺訓）

心地觀經報恩品（父母恩重を說く）

百喩經（印度御伽噺）

孝子經（出家しても父母孝養は必要）

玉耶女經（佛陀の一長者新婦への教訓）

六方禮經（世間的修身）

般若心經（唐玄奘三蔵の譯）

妙法蓮華經（鳩摩羅什の譯、大乘の極致）

五「愛國百人一首物語」松村英一著

（天佑書房、昭和十八年十一月刊、定價參圓＋特別行爲稅相當額拾錢、本文四四〇頁）

古書價格五百圓也。

昭和十七年、日本文學報國會は愛國百人一首を選定することとし、十一名（佐佐木信綱、尾上柴舟、太田水穂、窪田空穂、齋藤瀏、齋藤茂吉、川田順、吉植庄亮、折口信夫、土屋文明、松村英一）を選定委員として委囑す。九月以降検討を重ね、十一月二十日午後情報局発表、翌日の新聞に一斉に掲示せらる。

選定歌は、柿本人麻呂の「大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも」より橘曙覧の「春にあけてまづ見る書も天地のはじめの時と讀み出づるかな」まで。

「愛國百人一首」解説本の代表格は、日本文學報國會編「定本愛國百人一首解説」（毎日新聞社、昭和十八年三月刊）なり。そは、選定委員數氏（土屋、尾上、吉植、川田、松村）の解説分担執筆によるものなり。一方、本書は一人（松村）の選定委員のみによるものなる處に特色あり。また、本書冒頭には「武士道歌五十首」（亀山天皇の「行末もさぞな榮えむ誓あれば神の國なるわが國ぞかし」など。）、「大東亞戰爭歌五十首」（石樽千亦「うろたへに頭狂ひしか盲撃ちにわが飛行機にわが砲をうつ」など。）も併載せらるるなど、時代の空気の厳しさを反映せり。

（令和二年四月六日受附）